ハートをこがせ！ Vol.10

埼玉県立上尾橘高校

東北支援ボランティア

被災地の「今」を感じた生徒の思いが活動を受け継いでいく

暑いし、きつい！でも、やり遂げた達成感がある

❶❷男子生徒約10人は、ネギの収穫作業を手伝った。天候は曇りだったが、ビニールハウス内は蒸し暑く、流れ落ちる汗を拭いながらの作業だった。出荷先が埼玉県の業者だと知り、作業の手にも自然と力がこもる。3時間ほどで軽トラック3台分のネギを収穫した。

❸❹もう1班は草むしり。「三角ホー」という初めて使う道具に苦労していた生徒も、徐々に慣れていき、雑草の山はどんどん高くなっていく。雑草が伸び放題だった一帯は、すっかり奇麗になった。この畑には、秋の収穫に向けて、次の作物が植えられるという。

そこに行かなければ感じられないことがあった

❺❻「南三陸町では住民800人あまりが犠牲となり、今も約200人が行方不明です」と話す語り部の言葉に生徒は息をのむ。そして、骨組みだけが残る南三陸町防災対策庁舎の前にある献花台で黙祷。高さ12メートルの破壊された建物が目の前にあっても、「この高さまで津波が来たのが信じられない」と生徒は言う。

❼❽2011年6月に初めて訪れたボランティア活動では、個人宅のがれきや汚泥の除去を行い、2年目は農業用水路の開通を支援した。参加した生徒の「『自分とは関係がない』と思う人が1人でも減るように」という思いが、今の活動につながっている。

震災を忘れてはいけないし、1人でも多くの人に訪れてほしい

2011年から毎年、埼玉県立上尾橘高校は、東日本大震災の被災地でのボランティア活動を続けている。今年は生徒16人、教師4人が参加。宮城県南三陸町でネギの収穫や雑草除去を手伝い、収穫最盛期の人手不足に一役買った。

南三陸町では、がれきは撤去され、道路は整地されて広くなり、復興は徐々に進んでいる。しかし、人口の流出が止まらず、商業施設が少ないことから、買い物も一苦労だと話す語り部の言葉に、生徒は「ここに来て、住んでいる人の話を聞かないと分からないことがたくさんある」と語った。そうした思いが後輩に受け継がれ、毎年の活動につながっている。

生徒のインタビューは P.24

ハートをこがせ！ Vol.10

埼玉県立上尾橋高校

東北支援ボランティア
震災を忘れないよう自分で見て、感じたことを伝えていきたい

震災の年から毎年訪れ、ボランティア活動を続ける

埼玉県立上尾橋高校が初めて東日本大震災の被災地でボランティア活動を行ったのは、２０１１年６月。「本校でも何かできないか」という生徒・保護者・教師の三者の思いが結実して、学校行事としての実施が決定した。仙台市に生徒36人が訪れ、個人宅のがれき撤去や汚泥除去を行った。以降、毎年夏に東北支援ボランティアを実施している。

今年は、７月末に16人の生徒が参加した。１年生から３年連続で参加している岡田夏実さんは、「作業はきついですが、少しでも被災地の役に立ちたいと思って参加しています。活動の合間に現地の人と話して、今どんな思いでいるのかを聞くことも、普段できない経験です」と、参加理由を語る。

活動は、車中１泊２日の強行日程だ。深夜バスで移動し、活動場所の南三陸町に早朝に到着すると、語り部と合流して、浸水したエリアを見て回る。津波がどれほどの高さまで来たのか、人々はどのように逃げ、また逃げ遅れて犠牲となってしまったのか。語り部は被災直後の写真を見せながら、「もし自分だったら、どうするのか考えてほしい」と語りかける。石岡拓馬さんは、大勢が逃げてきたという高台から、今は穏やかな海を見ながらこう思ったと言う。

「ニュースの映像などを見てはいましたが、実際に高台に立って、目の前にある海の水位が十数メートルも上がったとは想像がつきませんでした。この近くには小学校があったと聞き、当時の僕と同じ年の子が壮絶な光景を見たのだと思うと、どんなに怖かっただろうと感じました」

ボランティア活動とともに現地に行く大切さを実感

今回のボランティア活動は農作業支援で、作業

教師の思い

やり遂げたという自信を、次の挑戦に結びつけてほしい

埼玉県立上尾橋高校
矢島茂樹（やじま・しげき）
教職歴26年。同校に赴任して１年目。教務部。英語科。

自分の意思で参加する生徒の強さを感じた

本校ではこれまで、陸前高田市、気仙沼市、南三陸町を訪れ、がれきや汚泥の撤去、被災された方との交流などを行ってきました。毎年、20人前後の生徒が参加します。費用の多くは県とＰＴＡの補助でまかなっていますが、生徒は数千円を支払う必要があるため、保護者の負担は少なからずあり、自分の小遣いで参加する生徒もいます。活動では、そうした自分の意思で参加する生徒の強さを感じました。現地での作業は選べませんし、環境が厳しい中での作業です。それでも、途中でやめてしまう生徒は１人もおらず、互いに励まし合い、全うしていました。

私自身、このようなボランティア活動に

は2つの班に分かれて行われた。1班はネギ収穫だ。7月末はネギの出荷最盛期で、ビニールハウス一面に青々としたネギが成長していた。商品を傷めないよう、根元の土を取り除いてから1本ずつ引き抜き、数十本まとめてからトラックに運ぶ。この日の天候は曇りだったが、ハウス内は蒸し暑い。「水、飲んだ?」「この量なら運べる?」などと、生徒たちは声をかけ合いながら次々と収穫していく。

もう1班の作業は、畑での雑草除去だ。放っておけば雑草はどんどん大きくなるため、こまめな除去が欠かせない。広い畑をメンバーで分担し、畝(うね)の間の雑草を根から刈り取っていった。

約3時間の作業だったが、スタッフからの「ありがとう」という言葉に、生徒は達成感に包まれた。

成長したネギの収穫は重労働だ。「人手が足りないため、ボランティアの力は重要ですし、復興のためにも、南三陸町に実際に来てくれるファンを増やしたい」と、畑のスタッフは話す。この畑は津波の被害を免れた里山地区にあり、地域活性化のために様々な活動が行われている。

岸本水希さんは活動翌日、部活動で友人に感想を聞かれ、「大変だったけれど、よい経験になったよ」と、被災地で見てきたことや活動の様子を伝えた。「来年は参加してみようかな」と言う友人に、思いが伝わったようでうれしかったと言う。

2学期の始業式では活動報告会を行い、10月に行われる文化祭では、昇降口に活動内容と生徒の感想をまとめたパネルが展示される。今回のリーダーを務めた千葉治郎さんは、2回参加して、現地に行く大切さを改めて感じたと話す。

「語り部の話は初めて聞くことが多く、復興の様子を実際に見て実感できることがありました。この活動が続いてほしいから、そのために現地で見たこと、感じたことを後輩に伝えたいと思います」

千葉治郎 ちば・じろう
3年生。リーダー。参加は2回目。生徒会長。陸上部前部長。

岡田夏実 おかだ・なつみ
3年生。参加は3回目。

石岡拓馬 いしおか・たくま
2年生。参加は2回目。陸上部部長。

岸本水希 きしもと・みずき
1年生。初参加。バレーボール部。体操部。

参加したり、被災地を訪れたりしたことは今回までありませんでした。そうした活動があると知っていても行動に移せていなかったのですが、生徒は自分の知らない世界に関心を持ち、一歩踏み出しました。そして、大変なこともやり遂げ、相手に感謝されました。そうした経験を自信にして、学習や部活動などで厳しい状況に置かれても挑戦し続ける人材になってほしいと思います。

本活動を始めた教師が異動して、今回は、本校に赴任してすぐの教師が活動の引率を務めました。参加者は活動を有意義に感じていますが、被災地の状況の変化に応じて、教師も生徒も活動の意義を見直す必要があると思います。生徒のさらなる成長につながる活動にしていきたいと考えています。

埼玉県立上尾橘高校

◎教育目標は、「地域に根ざし、生徒一人ひとりを伸ばし、自立(律)して社会を支えられる人間を育てる」。1年生の就労体験活動、地域の無形民俗文化財「どろいんきょ」の有志参加など、体験学習を重視している。また、1学年2クラスの情報コースを擁し、簿記や情報処理などの様々な資格取得にも力を入れる。
◎**設立** 1983(昭和58)年
◎**形態** 全日制/普通科/共学
◎**生徒数** 約490人
◎**2016年度進路実績(現役のみ)**
四年制大学は、城西大、聖学院大、大東文化大、東海大、東京国際大、鶴見大に6人が進学。短期大学5人、専修・各種学校43人。就職50人。
◎**URL** http://www.ageotachibana-h.spec.ed.jp